

逃げ込む山がない：

リワ・デルタの不利な状況にある人々の最後の砦マングローブ林

アポロサ・ラムロ

フィジーの人口、インフラ、経済活動の大部分が沿岸地域に集中しているため、マングローブ林はフィジーの重要な生態系である。マングローブ資源は、沿岸・三角州に住む人々の主要な生活支援システムの一つである。推定総面積 46,600 ヘクタールのフィジーは、パプアニューギニアとソロモン諸島に次いで太平洋地域で3番目に大きなマングローブの面積を持ち、そのほとんどがビチレブ島とバヌアレブ島の2つの主要な島にある。マングローブの最大の面積は、ビチレブ島のリワ・デルタにあります。脅威にさらされています。

これらの沿岸地域は、気候変動の最前線にあり、特に熱帯サイクロン時の高潮による継続的な海面上昇と沿岸浸食は、沿岸地域に壊滅的で生命を脅かすような洪水をもたらす可能性があります。Rewa Delta の低地の平地は、大雨が降るといつも浸水する。フィジーの海面上昇の影響を受けた沿岸地域は、フィジー政府によって高台に移転させられていますが、残念ながらリワ・デルタの人々には逃げ場となる山がありません。リワ・デルタの人々は、浸水した地域から逃げるできないので、自分たちのことを「*Kai Vanua Ca*」というバッドランドの人々と呼んでいます。彼らはこの気候変動の影響に適応してきたので、リワ・デルタが浸水しても、「*Na Tebara sili wacala*」と言って、ただの雨水だと言います。したがって、彼らには山がないので、マングローブ林が彼らの問題に対する唯一の解決策なのです。

マングローブは、沿岸地域の気候適応において重要な役割を果たしています。そのため、これらの沿岸地域では、マングローブ林が、沿岸浸食、高潮、海面上昇に対する大幅な緩衝作用によるサービスと保護を提供する、最も生産性の高い自然由来のソリューションであると認識されています。マングローブ林は、海岸浸食、高潮、海面上昇を防ぐ効果があり、波の高さを下げ、家や財産、インフラを危険な洪水から守ってくれます。沿岸の脆弱性が増すにつれ、気候適応策やリスク軽減策を講じることが極めて重要になります。

そのため、リワ・デルタの劣化した地域にマングローブ林を復元することで、気候変動の脅威から身を守ることができ、気候変動によって脅かされている食糧と生活の安全を強化することができます。沿岸の村落共同体は、マングローブやその資源に所有権がないにもかかわらず、マングローブの利用方法についてかなりの自治権を持っており、一般的には、このような共同体は国のマングローブ資源の無給の管理者として長い間頼りにされてきました。しかし、このプロジェクトへのコミュニティの参加は、6つの村の女性グループを中心に目覚ましいものがありました。女性グループの間では、脆弱なデルタの生態系を修復・保全することで、これ以上の海岸浸食を最小限に抑え、木材燃料をより持続的に供給し、乱獲による既存のマングローブへの圧力を軽減したいという強い要望があります。リワ・デルタのほとんどの女性は、収入源や家族の食料としてマングローブに依存しており、マングローブで釣りをしたり、カニを捕ったり、貝を採ったりしています。このような継続的な利用により、生息環境が悪化し、その結果、生活に悪影響を及ぼしています。そこで女性たちは、村の前浜にマングローブを植えるために協力することを決めました。ITTO プロジェクトでは、コミュニティの意思決定プロセスに女性を参加させることで、女性が自分たちの生活に影響

を与える環境問題を主導し、主張できるようにしました。これにより、コミュニティの女性や少女の食糧安全保障（海洋資源）、技能開発、教育の向上に貢献しています。例えば、ナシライの女性グループは、マングローブの復元・再生作業の一環として、前浜に 5000 本のマングローブの苗を植えました。また、沿岸の侵食を防ぎ、将来の資源とするために、マングローブ林の背後に、タボラ (*Terminalia catappa*)、ブトゥ (*Barringtonia edulis*)、ディロ (*Calophyllum inophyllum*)、ココナッツなどの沿岸原産の木を植えました。さらに、ワイコカの女性グループは、2019 年にマングローブの植栽の生存評価を行い、植栽が不十分な場所を再植しました。プロジェクトの成功には、女性グループの関与が欠かせません。

アポロサ・ラムロ (Aporosa Ramulo)

フィジー共和国林業省

マレーシア・サバ大学で林学の学士号を優等で取得した後、2019 年からフィジー共和国林業省入省。現在、国際熱帯木材機関 (ITTO) フィジー・マングローブプロジェクトのコーディネーターを務めている。